

遠部チーム

メンバー：医師：遠部英昭、看護師：小山敏子・勢村陽香、臨床工学士：大嶋 勝

活動期間：4月26日～4月30日

活動場所：宮城県石巻市

石巻赤十字病院のエリア・ラインシステムについて

チーム代表者 社会医療法人緑社会 金田病院 医師 遠部 英昭

4月26日よりJMATおかやまの災害派遣チームの一員として、石巻市の湊小学校に派遣されました。活動内容、日程、現地の状況については、今まで派遣された方がすでに報告されており、重複する点が多々あると思われましたので、病院勤務医(脳神経外科)である私が、災害派遣に従事した一個人として、経験した医療支援システムについて記してみたいとおもいます。

一番印象的であったのは、石巻赤十字病院を中心として機能していたエリア・ラインシステムでした。石巻赤十字病院の災害医療コーディネーターの統括下に被災地を七つのエリアに分け、それぞれに各地の赤十字病院など長期支援可能な施設から派遣されたチームが、幹事役として担当エリアにおける運営を行い(エリアに相当)、その傘下にそれぞれに「JMATおかやま」の様な複数の派遣チームが継続的に配置され(ラインに相当)、担当エリア内の主要な避難所で外来診療を施行、また比較的小さな避難所の訪問診療を行うというシステムでした。

ラインチームの一員としての医療支援活動に関しては、既に詳細な報告がされていますので、割愛させていただきますが、我々が派遣された時点では、各避難所での医療必要度(糖尿病、ワーファリン服用者、歯科疾患、眼科疾患、眼鏡等の調節など)や、要介護者の洗い出しなどが進行中でした。それらの情報が、各ラインチームより個々のエリアで集計され、毎日夕刻、災害医療コーディネーターが石巻赤十字病院で

エリアチームを集めてミーティングを行い、これらの情報を分析、それを各ラインにフィードバックするというシステムでした。このシステムにより、石巻赤十字病院の災害医療コーディネーターが、各避難所の医療・介護ニーズを継続的に把握し、医療支援を調整することが可能となっているのです。特に重点を置いていたのは、発熱者、下痢などの消化器症状、麻疹などと、日常生活での要介護者の把握でした。また、診療所の再開などの状況をみながら、避難所の統廃合やライン数の調節を有機的に行っているようでした。

予想もされない大震災にさいして、当初は混乱もあったことは察するにあまりありますが、このようなシステムが、震災後比較的早期に確立されたことに、感動すら覚えます。ほかの地域でも、それぞれの支援活動が、継続的に行われていると思われませんが、今後は在宅での医療



遠部チーム

支援を含め、地域医療の復興とリンクしながら、有機的かつ長期的な支援計画が必要になると感じました。

既に派遣された方々の報告で被災地での医療必要状況が徐々に明らかになるに従い、出発前は一人の脳外科医として何ができるのか、と不安もありましたが、避難所で生活される方々に

接することで、改めて自分を見つめ直し、元気を頂いたような気がいたします。

このような災害支援システムに一員として参加できたことに、改めて岡山県医師会の方々や、金田病院のスタッフの方々に深く感謝したいと思います。

災害支援で感じた今後の課題

遠部チーム 社会医療法人緑社会 金田病院 看護師 小山 敏子

今回JMATおかやま災害支援活動に参加させていただいた。現地活動を通じて多くを感じ、考える機会を得た。まず支援にあたり、事前情報が不足していた点。これは各個人の努力も必要と思うが、初めて参加するものにとって精神的負担は大きい。災害支援研修などを行い、事前の心構えや役割、惨事ストレスの可能性などについて学んでおくべきである。参加された方の中には精神的にバランスを崩された方もおら

れると聞いた。支援情報についても、直前の班から受けるだけではなく、医師会を中心に各専門職全体にその都度発信したほうが良いのではないか。現地での在庫管理が負担であるため、現地への支援物資についても、現在必要かを現地に確認して発送し、在庫過多を防ぐ必要がある。支援をよりスムーズに行うためにも、平時から現場に即した支援協力を医師会にはお願いしたい。

東日本大震災災害派遣報告～日本人の強さ～

遠部チーム 社会医療法人緑社会 金田病院 看護師 勢村 陽香

私は4月26日から30日にかけて災害支援活動をするために宮城県石巻市へ行きました。震災から1ヶ月半程でしたが、その中でも被害の大きい場所にあるお店が「元気に営業中」と営業を再開していたり、避難生活を送っている被災者が働きに出ている現状をみて、日本人の強さを感じました。自分たちが生活していくために、必死になって働く日本人が輝いて見えました。それを支える日本全国の人が、被災者のために活動に取り組む姿に感動しました。そして私自身が日本人であることを誇りに思いまし



診察風景

た。

被災地を実際に目の当たりにしたときには言葉になりませんでした。町人も復興に向けて着実に一步一步進んでいることを間近に感じることができました。また、震災後の避難所生活

の中にある子供たちの屈託のない笑顔や、結婚記念日の写真に写る照れたご夫婦に逆に元気もらい、人の力の偉大さを実感した5日間でした。

子供達の笑顔のために

遠部チーム 社会医療法人緑社会 金田病院 臨床工学士 大嶋 勝

4月26日～30日JMATおかやまに参加しました。

被災地に近づくにつれ、自分の眼で見た被災地の姿に、ただ唖然とするだけで言葉になりませんでした。

この中で自分に何が出来るだろうと自問自答をしながら、この活動期間を過ごしました。

被災地での活動の中で、明るく元気に、遊んでいる笑顔の子供達をみて、この子供達の笑顔が無くならないように、今は、物資的な支援は

日本をはじめ世界中から届けられているが、今後は物による支援ばかりではなく精神的な支援が必要になってくるのではないかと感じました。

医療というかたちだけでなく、心のサポートを継続的におこなうことが、子供たちの笑顔を守ることでできる方法なのではないかと思えます。

これから支援を継続していく中で、ますます心のサポートができるような支援・協力体制の構築が必要であると考えます。



大河チームと遠部チーム